大山寺僧坊跡発掘調査成果Ⅱ

寂静山地区J―14地点

前回は寂静山地区全体についてお話しましたが、今回は発掘調査を行ったJ―14地点の僧坊跡の「入り口」のお話をしたいと思います。

J―14地点の僧坊跡は、寂静山地区南側の僧坊群の中央付近に位置し、東隣りにはこれに付属するように2つの小平坦地があります。規模的にも大きかったことから、ここを発掘調査地として選びました。（図1）

この僧坊跡は長辺37・5m、短辺29・1mの長方形の平坦地をもち、その平坦地の東側と西側には土塁状の高まりが南北に延びています。（図2）この土塁は、西側の参道と僧坊の平坦地とを区切るためのものと考えられます。

図1　寂静山地区南側の僧坊跡群

僧坊跡J―14の入口は？

この平坦地の北側縁、中央やや西寄りの斜面には溝状の窪みがありました。ここを発掘したところ、6段にわたる石の階段が検出されました。（写真1）石段の両側には石が列状に並べられ（この石列を耳石と呼んでいます）、階段とその外側とが区切ってありました。石段北側は、治山管理道路設置時に破壊されて不明ですが、石階段が残っている部分での規模は、幅約2.6m、延長約3.2mで、高低差は約1.3mでした。この石階段は、僧坊の「正面入り口」と考えられます。本来は、僧坊北側（下手）に参道からの枝道が延びており、石階段はこれとつながっていたと考えられます。この形状は僧坊跡群内では各所に認められ、僧坊群の特徴の一つでもあります。

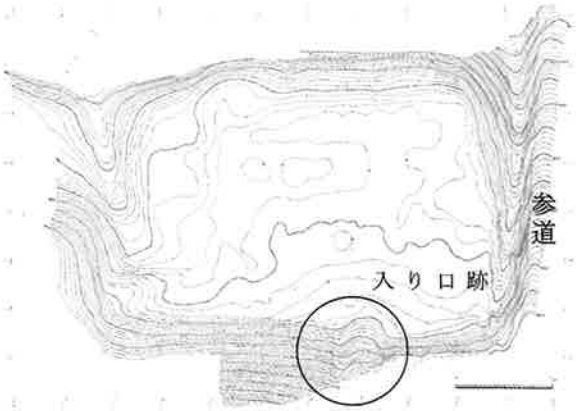

図2　僧坊跡J－14の平坦面

また、石段を上がりきった場所で大きな礎石が検出されました。これは、入り口の門跡の一部と考えられますが、その周辺に大きな樹木があって発掘できないため、その構造などについては明らかにできませんでした。

写真1　僧坊跡J－14の石階段（上側から）

僧坊の入り口との比較から

今回確認された僧坊跡の入り口を、現存する僧坊のものと比較してみたいと思います。

大山寺僧坊「洞明院」は、江戸時代に建立された貴重な建物で、阿弥陀堂（重要文化財）への参道と旧横手道（岡山県美作方面からの参道）の交差点にあります。その入り口は、横手道側に付けた石階段で、その上には門が建てられており、僧坊跡J―14の入り口と構造がよく似ています。（写真2）

このように、現存する僧坊にも、中世の僧坊の面影が残されていると考えると、また一つ大山寺周辺の散策に楽しみが増えるのではないでしょうか。

写真2　洞明院の正面入り口

（社会教育課文化財調査班）